

大宰府アカデミー・令和編 第17講 令和6年8月21日(水)質問及び回答(Q&A)

「福岡藩・黒田家と太宰府～黒田如水を中心に～」

講師・回答： 中野 等先生(福岡市博物館総館長)

この度は大宰府アカデミー・令和編を受講いただき誠にありがとうございます。
皆様からいただきましたご質問につきまして回答いたします。
なお、ご質問につきましては、抜粋して掲載しておりますことをご了承ください。

Q/ 戦国時代における茶道や連歌の政治的な位置づけはどのように考えればよいでしょうか。例えば連歌は、講座の中では「高次の情報交換の場」として有益であったというお話でしたが、それは資料からはどのように裏付けられるのでしょうか。

A/ 回答

茶道については「政道茶」という言葉に示されるように、信長の段階でかなり高度に政治化されていきます。茶会を開く権限が、戦の論功行賞として、家臣の秀吉に許されていることがわかります。

また、連歌興行に隠れてどのような情報がやりとりされたかは、口頭でのやりとりということで、残念ながらなかなか文字資料には残りません。いってみれば、状況証拠しかないわけですが、この点については綿抜豊昭『戦国武将と連歌師』（平凡社新書）に、孝高の連歌に関連しての言及があります。ご一読いただければと存じます。

Q/ 戦国大名とキリスト教の関係について、その入信の理由には純粋な信仰に基づく場合や、鉄砲等武器を入手するための便宜的なもの、などがあるのではないかと想像していますが、黒田孝高・長政親子の場合はどうだったのでしょうか。

A/ 回答

黒田孝高がキリシタンに入信した時期は天正十三年八月頃と考えています。この段階の孝高は播磨国内の宍粟郡一郡を知行する程度で、大名としても然程おおきな存在ではありませんでした。その宍粟郡も内陸に位置しており、当然のことながら領内に港などもありません。自立的に对外贸易などを展開できる状況でもないので、便宜的

なものとする必要はないと思います。入信の頃には実父を亡くしていることなどから考えて、純粋な信仰だったように思います。とはいえ、キリスト教のみを排他的に信仰し、他の宗教を弾圧するというような姿勢はみせていません。

長政は父親のすすめで入信したようで、然程信仰心が篤かったとはおもいません。また、長政が家督を継いだ頃には、秀吉が「バテレン追放令」を発出したあとなので、そうした関係からも長政のキリシタン信仰は希薄だったと思います。関ヶ原合戦の頃には蜂須賀から迎えていた正室を離婚していますので、この点からも筑前入国の頃には棄教していたと考えられます。

※ ご質問ありがとうございました。